

平成 21 年度

病害虫発生予察特殊報 第 2 号

平成 21 年 12 月 7 日
茨城県病害虫防除所
Tel : 029-227-2445

メロンおよびキュウリの退緑黄化病の発生について

病害虫名：メロン退緑黄化病，キュウリ退緑黄化病

病原ウイルス：ウリ類退緑黄化ウイルス *Cucurbit chlorotic yellows virus* (CCYV)

発生作物：メロン，キュウリ

1. 発生確認の経過及び県外での状況

- (1) 平成 21 年 9 月，県央地域のメロンほ場で，葉に退緑・黄化を伴うモザイク症状を生じる株が発生した。また同年 10 月，キュウリでも同様の症状の株が発生した。被害株の症状からウイルスによる病害が疑われたため，茨城県農業総合センター生物工学研究所において，RT-PCR 法による検定および遺伝子配列の解析を実施したところ，それぞれ本県では未発生の *Cucurbit chlorotic yellows virus* (CCYV) によるメロン退緑黄化病およびキュウリ退緑黄化病と確認された。
- (2) 本ウイルスはクリニウイルス属のウイルスで，平成 19 年に（独）九州沖縄農業研究センターにより確認され，その後九州地方の各県や，高知県，愛媛県，埼玉県，栃木県，群馬県で本ウイルスによる病害が確認されている。

2. 病徴

病徴はメロン，キュウリともに主に葉に見られ，はじめ葉に退緑症状を伴う小斑点を生じ（写真 1，2），その後，小斑点が拡大しながら融合し，大型斑点症状や，さらに葉脈間が退緑した黄化症状を呈する（写真 3）。病徴を生じる葉は上位方向に進展し，下位方向への進展や異なる葉位で同時に黄化することはない（写真 4）。発病時期が早いほど果実の収量や品質に影響をおよぼす。

なお，本病はオンシツコナジラミにより媒介されるメロン黄化病，キュウリ黄化病（BPYV）と症状が酷似しており，肉眼による区別は困難である。

3. 伝搬方法等

本ウイルスは，タバココナジラミバイオタイプ Q 及び B により媒介される。タバココナジラミは，ウイルスに感染した植物を吸汁することでウイルスを獲得し，半永続的に伝搬能力を保持する。その他詳細については不明だが，既知のクリニウイルスでは，経卵伝染，汁液伝染，種子伝染，及び土壌伝染はしないことが確認されている。

現在までに自然感染の確認が報告されている作物は，メロン，キュウリ，スイカである。

4. 防除対策

- (1) 雑草はタバココナジラミの生息場所となるので，ほ場内外の除草を徹底する。
- (2) 育苗時に感染すると被害が大きくなるので，育苗時の防除を徹底し，症状が疑われる株は直ちに処分する。
- (3) 施設栽培においては，ハウス開口部に 0.4mm 目合い以下の防虫ネットの設置や，ハウス周辺に光反射マルチを設置すると，タバココナジラミの侵入防止に効果がある。なお，防虫ネットの設置はハウス内の温度上昇が懸念されるので，遮光資材の設置等，降温対策を講じる。
- (4) ハウスに UV カットフィルムを展張すると，タバココナジラミの侵入抑制効果があるが，生育が軟弱になることや，ミツバチの行動に影響を及ぼすことがあるので注意する。

- (5)タバココナジラミの防除を徹底する。県内では薬剤抵抗性のあるバイオタイプQが主であるので、効果のある薬剤を選択する(表1)。また、黄色粘着板を利用して発生動向を把握し、発生初期に防除を行うと効果的である。
- (6)施設栽培においては栽培終了時に、株元を切断する等の断根処理と除草を行った後、ハウスを密閉して1~2週間程度蒸し込み処理を行い、タバココナジラミを確実に死滅させる。



写真1 葉の退緑小斑点症状(メロン)



写真2 葉の退緑小斑点症状(キュウリ)



写真3 葉の退緑黄化症状(メロン)



写真4 被害株の症状(メロン)(葉の退緑症状は上位方向にのみ進展する)

表1 メロンおよびキュウリでタバココナジラミバイオタイプQに効果がある主な薬剤(平成21年10月23日現在)

薬剤名	備考
ベストガード(粒剤,水溶剤),アルバリン/スタークル(粒剤,顆粒水溶剤)	ネオニコチノイド系剤
サンマイトフロアブル	有効成分:ピリダベン
コロマイト乳剤	有効成分:ミルベメクチン
オレート液剤	物理的な作用により効果がある薬剤
ポタニガードES	微生物農薬

農薬を使用する際は、農薬ラベルに記載された使用方法、注意事項や有効成分の使用回数等を確認のうえ使用して下さい。

周辺作物等へ飛散(ドリフト)しないよう十分注意して散布して下さい。